

## マラルメと師弟のまじわり<sup>(1)</sup> (英文タイトル: Mallarmé and Lesson of The Master)

熊谷 謙介

19世紀後半フランスにおける文学・芸術史上の変革、モデルニテ（現代性）と称される現象を考えると、伝統的な体制に対する「天才的」個人の反抗といった物語に還元される傾向があった。詩においてはバルナス（高踏派）に対して、ランボー、マラルメ、ヴェルレーヌといった詩人たちが、各人各様の新機軸を打ち出すという解釈が、これまでの文学史では大勢であった。とりわけマラルメは「象徴主義」というレッテルを貼られるだけでなく、現代詩や現代の美学の先駆者として、たびたび言及される位置にありつづけた<sup>(2)</sup>。絵画においては、サロン制度に立脚したアカデミズムと「印象主義」の対立がそれに当たるが、狭義の印象主義からも抜け出したゴーギャン、ゴッホの画業は、両者の壮絶な放浪の人生とあいまって、ある種の芸術家神話として描かれてきた。

しかし、倉方健作が示すように、バルナスは同一の主義を奉じる詩人たちが結束してできた「流派」であるよりも、当代の詩人たちが互いの作品への尊敬の念から集まった「グループ」といった方が正確であろう。またそこから「文学史上」排除されたかに見えるマラルメやヴェルレーヌも、新しい「流派」を立ち上げることにどこまで積極的であったかは疑問が残るところである<sup>(3)</sup>。絵画芸術について言えば、「印象主義」という呼称が誹謗者から与えられたレッテルを基にしていることは知られており、実際は、「印象派展」に出品したさまざまな方向性を示す画家たち——モネからルドンまで——の集合体であったことは否定できない。また守旧派にかつて分類されてきたピュヴィス・ド・シャヴァンヌが、実際にはゴーギャンやマティスに多大な影響を与えていることが示されているように、伝統派と前衛の対立の枠組みを再考するレヴィジョニズム的研究も進んでいる状況である。

こうした研究史的背景から、二つの観点が浮かび上がってくるだろう。第一に、文学・芸術の集団性という問題である。一人の作家・芸術家を論じるモノグラフィー研究が、アカデミズムの中で（とりわけ博士論文という形では）オーソドックスな研究であり続ける現状において、複数の作家・芸術家の関係性を、彼ら・彼女たちが置かれた場のなかで見ていく視点は、依然として貴重であるように思われる。これは単純に芸術運動の体制を見ていくという立場ではない。むしろ、単一の主張や宣言に還元されがちな芸術運動に含まれる多くの葛藤や対立を見るという立場であり、その運動のなかで各人が行う駆け引きや位置取りをゲームとして考え、それを通じて、どのように文学場・芸術場が社会全体の中で維持されているのかを考えるという立場である<sup>(4)</sup>。

この観点は特に19世紀後半の文学状況、とりわけ詩壇を考える上で重要である。この時代はそれまで長らくフランスの文芸活動の一大拠点となっていた、貴族階級の女主人が主宰する形式の文芸サロンが衰退へと向かっていく時代であり、未来派、ダダ、シュルレアリスムといった前衛芸術運動集団が勃興する前の時代であった。フローベールが『ボヴァリー夫人』で、ボードレールが『悪の華』で、公序良俗壊乱の廉で訴えられたとき、擁護したのはそれぞれマチルド公妃とサバティエ夫人であった。騎士が貴婦人に愛の言葉を語る行為に代表されるような、ミューズに捧げる詩という伝統は、詩作品の背景

となる物語として残り続けるものの（アポリネール、エリュアール……）、経済的な援助をするパトロンとしての役割は、第三共和政という大衆社会の勃興期において後退していくことになる。詩作のインスピレーションを与えるはずのミューズは、「金で買われるミューズ」（ボードレール）となるのである。ゾラは民主主義の時代において前時代的となったサロンのあり方を批判しているが、彼によれば、経済的な独立を得られる作家であれば、文学に打算的な形でしか興味をもたない人々とおしゃべりする必要はもはやないのである<sup>(5)</sup>。

また、1830年代にはじまる文芸ジャーナリズム隆盛の傾向は、1880年代以降に加速していく。出版の自由（1881）が認められることによって、独立系の小雑誌 *petites revues* が次々に発行され、若い文学者たちが文筆活動を行う場が生み出される。その結果、デビュー作にとどまらず、第二作、第三作の詩集の発行も続けられるケースが増え始める<sup>(6)</sup>。大衆の消費の対象となった小説だけでなく、詩集も小規模ながら一定の購買層を確保したことを示すと同時に、詩人たちが別の収入を持たない限りは、文筆によって自活しなければならぬ時代を本格的に迎えたことを告げる現象と言えよう。

一方で、小説がジャンルとしても出自があいまいで、当初からジャーナリズムと密接な関係を示している「私生児的」で「父のいない」ジャンルであるのに対して、詩は「父」による権威づけが必要なジャンルであった。小説が「一ページ〇〇フラン」という売られ方、契約をされかねないジャンルであるのに対して、詩は象徴価値がすべてであるジャンルであるだけに、いわばその品質を保証するギャランティが必要であった。詩的伝統や政治的・宗教的権威をギャランティとする時代もあったが、19世紀末においては、先輩詩人（ユゴー、ボードレール、マラルメ……）や「流派＝ブランド」（デカダン派、象徴派……）がギャランティとして機能していた。序文 *préface* をすでに著名となった詩人に求め、献本によって書評 *critique, compte rendu* を書いてもらうことを待ち望む姿は、きわめて現代的な文壇状況を示すものであると言ってよいだろう。

大衆社会の成立期にあつて、詩人たちは集団を形成し、言葉を互いに流通させながら、文学の商品化の時代を生きていた——、このような文学集団のありかたを考えるのが、本稿の第一の観点となる。これは「文学の自律性」（ブルデュー）を再考するきっかけともなるだろう。「象牙の塔」に閉じこもり、秘教的な作品を孤独に生み出す——とりわけマラルメと結びつけられがちな——詩人像に還元されがちな「自律性」は、昨今フランスにおいて盛んに語られる現代文学の危機の元凶として語られるだけに、慎重な吟味が必要であろう。文学の自律性は一人の作家によって成立するものではなく、多くの文学者によって行われるゲームによって形作られることを示すのが、本稿の主たる目的である。

第二の観点は、こうした文学・芸術の民主主義的状况を踏まえたうえで、世紀末の文学集団に特徴的な「師弟関係 *maître et disciple*」を考えてみるというものである。実はこの両者は矛盾するものではない。クリストフ・シャルルが示すように、「第二帝政の下で、独裁権力の庇護によって護られ、また帝国貴族のサロンに出入りを許されていた、芸術のための芸術の信奉者は、第三共和政の下ではこうした保護を奪われ、師匠が弟子を迎えるといういくつかの閉鎖的空間に閉じ込められていった」<sup>(7)</sup>のである。ギャランティは貴族から師匠へ移行したと言える。一方、20世紀の前衛芸術運動、例えばシュルレアリスムは、サドやロートレアモン、アポリネールなどにオマージュを捧げるものの、先輩詩人を内に引き込んで首領とする運動ではなかった。のちに「除名」を繰り返した「法王」とあだ名されたブルトンの強権的な姿勢についても、師弟関係を前提としているよりは、政治的党派をモデルとするような「同志」的關係によるものであった。実際、シュルレアリスム発足当時、ブルトン（生年1896）とそれ以外の構成メンバーの世代差はほとんどなかったと言ってよいだろう。

それに対して今回注目する、1880、90年代のマラルメ（1842）を取り巻く文学集団は、その多くが20歳ほど年少の60年代生まれの詩人たちであり、ヴァレリー（1871）やジッド（1869）、ピエール・ルイス（1870）に至っては30歳ほど年少になる。ルコント・ド・リール（1818）やバンヴィル（1823）

を代表とするバルナスに対しては、彼らの20歳ほど年下の青年マラルメはすすんでその詩を『現代バルナス詩集』（第一次（1866）・第二次（1870-71））に寄稿し、むしろ「過激バルナス主義」を体现するかの位置を示していた。しかし、第三次の合同詩集への「牧神の即興」（『牧神の午後』の前のヴァージョン）の掲載をアナトール・フランスに拒絶され、その後10年間、詩壇の表舞台からは姿を消す。80年代中期に彼が「復帰」したのは、後に見るように、60年代生まれの詩人たちによって「師匠」に祭り上げられたことに起因している。

こうした世代差から生まれる師弟関係について、本稿ではマラルメが日々行っていた火曜会の回想だけでなく、彼が論考に残している文学論や教育論を分析することで、彼が考える理想の「師弟のまじわり」を素描したい。アンシャン・レジーム的な文芸サロンの衰退と、前衛芸術家集団によるセクトの勃興の間で、マラルメが実践し、夢見る文芸共和国の姿を、19世紀末の文学集団のあり方の、さらには歴史学でいうところの「社交性 sociabilité」の一モデルとして提示することが目標である。

## 1. 師弟の時代

博覧強記の文学研究者として知られるジョージ・スタイナーは、西洋文化史における師弟関係を論じた『師弟のまじわり』において、3つの師弟関係を分類している。それは全く単純な分類であり、第一に師匠が弟子をつぶすもの、第二に、弟子が師匠を裏切るもの、そして最後に相互信頼や相愛に至るもの、である<sup>(8)</sup>。第二の関係がイエスに対するユダの関係であるとすれば、最後のものはギリシャ的な饗宴の様子が伺える——スタイナーは教育にひそむ性愛についても指摘している——が、師弟のまじわりが特権的な文学的テーマとなるのは、19世紀後半、とりわけ1890年代である。

「世紀末」とひとくくりにして扱われがちな時代について、ピエール・シッティは1880年代と1890年代の文学的モードの違いについて、主として小説の分析から論じている<sup>(9)</sup>。それを一言でいえば、独創性 *originalité* の時代から、責任 = 応答 *responsabilité* の時代への移行と定義づけられる。その図式にのっとって、本稿の問題に近い作品群を抽出したものが下記となる。

### 1880年代：個人主義、自由、独創性、人工性

例、自由詩・ディレクタント小説

- 『さかしまに *À rebours*』（1884）（ユイスマンス）

### 移行期

- 『自我崇拜 *Culte du moi*』三部作（モーリス・バレス）
  - 『蛮族の眼の下で *Sous l'œil des Barbares*』（1888）
  - 『自由人 *Homme libre*』（1889）
  - 『ベレニスの園 *Le Jardin de Bérénice*』（1891）

### 1890年代：自我を包む道徳、群衆、無意識、自然、生、本能

例、師弟小説・無意識についての言説

- 『弟子 *Le Disciple*』（1889）（プールジェ）
- 『デラシネ *Les Déracinés*』（1897）（バレス）
- 『死者たちの太陽 *Le Soleil des morts*』（1898）（カミーユ・モークレール）
- 『地の糧 *Les Nourritures terrestres*』（1897）（ジッド）

それぞれの作品については、シッティの分析とは別の観点から指摘を加えたい。1880年代は後に見るジャン・モレアスの「象徴主義宣言」に代表されるように、個々の流派がマニフェストによって自らの存在価値を示す、個人主義の時代とされるが、例えば、象徴主義の理論的支柱とされた批評家レミ・ド・グールモンが、世紀末文学者列伝とも言うべき『仮面の書』において、象徴主義を「文学における個人主義、芸術の自由、既成の公式の放棄、新しいもの、変わったもの、そして奇妙と思われさえするものへの傾向」<sup>(10)</sup>と定義したことに、それは示されているだろう。その実際の適用例として挙げられるのは、やはり自由詩と称される韻律の自由化の運動であり、誰がその発明者だったかをめぐっては、1880年代後半を中心として盛んに**論争 polémique** が起こった。このような独創性をめぐる議論も、詩壇全体の存在感を高める効果があったとも言えるだろう。

またユイスマンズの『さかしまに』は、文学史的には自然主義小説からの転回点を示すメルクマールとして論じられることもあるが、むしろ「デカダンス」と呼ばれる文学や芸術を愛好するディレッタントという新種の人物像を、彼が引きこもるパリ郊外のフォントネーの屋敷という環境と合わせて分析する、自然主義的なアプローチにあくまでも忠実な作品である。しかしそこで描かれ強烈な印象を残したのは、珍奇なふるまいを繰り返す芸術愛好者であった。『さかしまに』は新たな時代のモデル小説として読むことができると同時に、ルドンやモロー、そしてマラルメの知られざる作品が主人公の口を借りて語られることで、一種のカタログ小説としての機能も果たしたと言えるだろう。

このような個人主義や社会通念からの自由というモードから、責任や倫理というモードへと変わる過程を映し出しているのが、バレスの三部作『自我崇拜』である<sup>(11)</sup>。第一部『蛮族の眼の下で』(1888)は、タイトルが示す通り、大衆=蛮族のただなかでどのように主人公の若者フィリップが、貴族的な自我を保持するかが問題となる、きわめて象徴主義的なテーマを持つものに対して、第二部『自由人』(1889)では、フィリップがロヨラの『霊操』に想を得た修練を重ねるなかで、「私は孤独を放棄した[……]行動的な生においてしか満たしえない欲求が少なからず存在しているからだ」<sup>(12)</sup>という発見に至る。行動的な生とは、具体的には政治行動を意味し、フィリップはブーランジェ主義者として選挙に立つことになるが、これはバレスの実際の行動そのものであり、こうした物語の展開が、このとき27歳の若者バレス自身の思想の転回の記録であることは明白であろう。『ベレニスの手』(1891)でフィリップが発見するのは、ベレニスに体现される生、本能、そして無意識であり、自我の閉域を破って自然の声に耳を澄ます主人公は、『さかしまに』のデ・ゼサントから遠く離れたところに来て来たことを如実に示すものである。

そして、90年代において前景化してくるのが、本稿のテーマである師弟問題であり、師弟小説の流行である<sup>(13)</sup>。1889年に発表されたポール・ブールジェの『弟子』は、弟子ロベール・グレルーが、師匠アドリアン・シクストから学んだ実証主義的思想を人生に適用して悲劇を迎え、師が信仰に立ち戻るという物語である。同時代において衝撃を持って迎えられた作品であり、文学史的には実証主義の破産宣告として位置づけられるこの作品について、ここでは、テーマとしばしば結びつけられる師匠シクストが語る言説の内実よりも、師匠の思想そのものが弟子の時代に適合しないという事態、すなわち世代間の価値観の齟齬という事態について着目したい。ブールジェはこの作品に「ある若者に」と題された、「君 tu」に呼びかけるスタイルの序文を付けており、読者を若い世代として想定することで、ある種の世代間ギャップを意識させるような仕掛けを与えている<sup>(14)</sup>。1840年近辺に生まれ1890年に中年期を迎えたマラルメ・ヴェルレーヌなどの世代と、60年近辺に生まれた若い詩人たちを結ぶ間の世代にあって、1852年生まれのブールジェは旧世代の批判をしつつ、バレス=フィリップのように個人主義という名のエゴイズムに毒された世代に対して、倫理の必要性を説くのである。

先述の『自我崇拜』を書き終え、『ベレニスの手』の出版記念パーティーが文学的事件にもなったバレスは、1897年、哲学教師に感化されたロレーヌの高校生たちがパリに上京し、それぞれの運命をた

どる『デラシネ』を記している。この作品もまたアラゴンをはじめとする未来の文学者たちに多大な影響を与えた師弟小説であり、若者小説であった。そして翌年、すなわちドレフュス事件がゾラの「我弾劾す」によって新たな展開を示した1898年に出版されたのが、カミーユ・モークレールの『死者たちの太陽』である。

主人公である若い詩人アンドレ・ド・ヌーズは、師カリクスト・アルメルのカリクストのサークルに出入りし、彼が唱える文学の教えを聞きつつも、当時若者たちをとらえていたアナキズム的行動の渴望との間で引き裂かれている。マラルメの火曜会に出入りしていたモークレール（生年1872）は、自らとマラルメをモデルとした小説を書いたのであり、師の名前カリクスト・アルメル Calixte Armel がマラルメ Mallarmé のアナグラムであることからそれは明らかであろう<sup>(15)</sup>。モークレールはマラルメにこの本を献呈しているが、マラルメは自らがモデルとなっていることを十分に知りつつ、その礼状の中で「エリート」の形成と、敗北<sup>(16)</sup>と内容を要約している。「エリート」は第一章のタイトルであるが、最終章の「暁」では、アナキストたちと市民の蜂起によりパリが混乱の極致に陥った夜が明け、「若者 jeune homme」と「老人 vieillard」の対話によって作品は終幕を迎えることになるのである<sup>(17)</sup>。

文学サークルという閉域を越えて街頭での直接行動を望む弟子と、それを抑えようとする師匠の対話については後述することにする。ここでは、この作品がアナキズム運動と文学の相克を反映しているだけでなく、政治による文学集団の崩壊、具体的に言えば、ドレフュス事件による文芸サロンの終焉という事態を告げるものでもあったことを指摘したい。純粋な文学空間に政治的議論が侵入し、意見の相違によってサロンが成立しなくなったことが、文学者サロンの崩壊の一因になったと言える。

1880年代の独身者の小説（『さかしまに』）から、1890年代の師弟＝父子の小説へ——、ひとまずこのようにまとめることができるだろう。より厳密に言うのであれば、師弟＝父子の小説ではなく、息子の小説と言えるかもしれない。弟子が残した手記を師匠が読むという結末の『弟子』については留保が必要だが、ここに挙げた師弟小説は、師の視点からではなく、弟子の視点から描かれていることが特徴的である。師匠の古い考えを弟子が疑問に付す、あるいは師匠に影響されて人生を破滅させられる若者を描くことで、作品は価値観の転換を問う「問題小説」となり、一種の父殺しの小説となるのである。

しかし、このように揺れる師弟関係を、師匠の側から見た作品はないのだろうか。わたしたちが本稿でマラルメを取り上げるのは、マラルメ＝師匠から見た、若者との関係に注目したいからである。そのために、まずは1880年代において、マラルメが若い詩人たちからどのような期待を受け、実際に彼がそれにどのように応答したのかを、確認したいと思う。

## 2. 「象徴主義者」マラルメ？

先述したように、マラルメは1880年代中盤に詩壇の中心に「復帰」した。それに寄与したのは、まずはヴェルレーヌによる『呪われた詩人たち』（1883）におけるマラルメ論であり、詩のアンソロジー *anthologie* と批評、さらには**文学者列伝**という形式によって、「知られざる詩人」マラルメの名声がにわかにも高まる。また先述のユイスマンスの『さかしまに』（1884）でも、マラルメの作品が主人公デ・ゼサントによって語られた。最後に『アドレ・フルベットの衰微 *Déliquescences d'Adoré Floupette*』（1885）という詩作品は、彼ら自身デカダンス詩人であるガブリエル・ヴィケールとアンリ・ボークレールによって偽名で書かれた、自己パロディー *auto-parodie* 的作品であり、出版界における反響は大きく、新しい詩の傾向の幕開けを告げるものとなった。火曜会というサークル *cénacle* に若い作家たちが集まってくるようになったのは、この三つの出来事がきっかけになったと言える。

それを受けて、この時代にマラルメが行ったのは、詩作ばかりではない。新しい世代ルネ・ギルの理論的著作『語論』に対しては、序文（「緒言 *Avant-dire*」）を書くことを引き受ける（1885）。これはま

さに、価値の定まらない新しい詩に対して、師匠が付与するギャランティに他ならない。またエドゥアール・デュジャルダンの求めに従って、彼が編集する『ワーグナー評論 *Revue wagnérienne*』、『独立評論 *Revue indépendante*』に連載も含めて寄稿している（1885-1887）。

1886年9月、ジャン・モレアスは「文学宣言（象徴派宣言）」（マニフェスト *manifeste littéraire*）を『フィガロ』紙に掲載し、「象徴主義」を喧伝しはじめる。その後、ルネ・ギルとジャン・モレアスは激しい主導権争いを繰り広げた。このような「学派」形成の動きに対して、マラルメは積極的に肩入れしたわけではないが、少なくとも自らを慕って「師」と仰ぐ若い詩人たちの想いを無視しなかった。

一方、文学史的には「象徴主義詩人」のもう一方の雄として並び立つこともあるヴェルレーヌは、この図式に激しく抵抗している。ジュール・ユレによる『文学の進展についてのアンケート』（1891）では、「象徴主義だって？ 理解できないね。そいつはドイツ語にちがいない。そうじゃないかい？ それには何か意味があるのか？ もっとも、俺にはどうでもいいことだがね。苦しんだり、喜んだり、泣いたりするとき、それは象徴のおかげではないことを俺は知っている。こんな風にいろいろと区別するのはドイツ主義なんじゃないか？」<sup>(18)</sup>と、フランスの外からやってきた者のマニフェストの無意味さを強調し<sup>(19)</sup>、象徴主義者 *symbolistes* を「シンバリスト *cymbalistes*」と毒づいてみせる。これは明らかに、自分の主義主張を新しい詩学と称して大きな声でわめきたてる、マニフェスト的行為を皮肉ったものである。また1889年に発表された「ステファヌ・マラルメに」という詩では、冒頭から「不用意な」[若者たち]が、マラルメを旗印にパルナス派に対抗しているのを物笑いの種にしている。

若者たちは一不用意なことに一  
リストを作ったようなのだ  
あなたは象徴主義者  
象徴主義者？ 対となるものに

Des jeunes—c'est imprudent—  
Ont, dit-on, fait une liste  
Où vous passez symboliste.  
Symboliste? Ce pendant [...] <sup>(20)</sup>

それに対しマラルメは、主要な著作で「象徴主義 *symbolisme*」という言葉を使うことはなかったが、象徴派の指導者というイメージを背負っていくことになる。先述の『文学の進展についてのアンケート』において、「パルナス派」と「象徴派」の対立を強調しようとするユレの問いかけについても（「新しい運動を生み出したのは師匠、あなたですね？」<sup>(21)</sup>）、「流派 *écoles* を嫌悪する」としながら、対立の図式そのものを拒否することはせず、次のように語っている。

私が流派の主人のような態度をとっているように見えるのならば、それはまずもって、若い人々の考えに常に興味を示してきたからでしょう。また、おそらくは、新参者がもたらしてくれるものの中に、新しいものを認めようとする生真面目さからくるのでしょう<sup>(22)</sup>。

ここだけ見れば、マラルメが若者たちがもつ潜在的な能力を好んで、詩人たちが集う場所の中心となっていたことが伺える。しかし、この箇所の前後を読むと、こうした認識が詩人の孤立を前提にしていることが分かる（「なぜなら私は、実のところ孤独だからです」）。詩人というのは「この社会が生きるのを許さない存在」で、「自分の墓に墓碑銘を刻む、一人きりの存在」であり、それ故に、文学者同士

が出会う場所が必要なのである。

実際には火曜会は、詩人たちが議論を交わす場所というよりは、「年長者の熱情を年少者に打ち明けるという習慣」<sup>(23)</sup>と別の箇所述べているように、マラルメが話すのを弟子たちが聞くというスタイルをとっていたようである。火曜会についての弟子たちの証言は数多くの著作で残されているが、ここでは詳述しない<sup>(24)</sup>。このように形成された「象徴主義」サークルについて、次章では、それに付随するマラルメの「文芸共和国」にむけた諸活動を確認するとともに、実際に行われていたであろう師弟のまじわりを、マラルメの作品から、すなわち師匠の立場から見た弟子とのコミュニケーションを見てみたいと思う。

### 3. 書物の教え<sup>(25)</sup>

「文芸共和国 *république des lettres*」は、マラルメも寄稿した 1870 年代の雑誌のタイトルであるが、マラルメの理想とする文学集団・共同体を指すのに適切な言葉であるように思われる。共和政の時代にあつて、神がない、王がない、そしてパトロンがないフラットな空間にあつて、文学者たちは何を根拠に作品を構築すべきか。マラルメが提示するヴィジョンは、アンシャン・レジーム下の「文芸 *Lettres*」の力を呼び起こしつつ、先に述べたような外部の絶対的な権威に依存しない文学者コミュニティであったと言える。しかしその中で、一般にヒエラルキーを前提とする師弟関係はどのように位置づけられるのだろうか。

マラルメが同時代の文学共同体の維持に向けて行ったことをまとめると以下のようになる。

- 膨大な量の書簡 *Correspondance*
- 追悼文、とりわけ「墓 *Tombeau*」と呼ばれた合同詩集
- 講演旅行（ベルギー（1890）、オックスフォード・ケンブリッジ（1894））
- 「文学基金 *Le Fonds littéraire*」（1894）
- 文人組織論（アカデミー・フランセーズ論（「擁護 *Sauvegarde*」（1895）））

総計 12 巻にも及ぶ書簡集に見られるように、マラルメは若い文学者たちに献本への礼状などを欠かさず行うことで、世紀末の文壇の一大中心の機能を果たしていたと言ってよいだろう。また先輩詩人が亡くなるたびに追悼文を記すことでオマージュを捧げ<sup>(26)</sup>、「墓」という合同詩集に詩を寄せるだけでなく、ボードレルの墓やヴェルレーヌの墓については、詩集のみならず記念碑建設に向けた実務も行った。講演活動、とくにベルギーへの講演旅行は、当地での象徴主義運動にギャランティを付与する意味があった。こうした活動は、中心地パリよりも地方や外国というマージナルな位置にいる文学者集団にとって、より重要な意味を持つものであった。

「文学基金」という構想は、すでに 1860、70 年代にその萌芽が確認できるが、イギリスに講演旅行に行ったときに垣間見たフェロー制度に、直接は触発されたようである。旅行後半年たった 1894 年 8 月 17 日の『フィガロ』紙 1 面に、マラルメは「文学基金」を提唱する記事を寄稿する（この大新聞への一面記事寄稿は詩人にとって一度きりのものとなった<sup>(27)</sup>）。これはフェロー制度と対比されるもので、マラルメにとって理想の援助制度というものは、研究や文学活動を行うために、大学や貴族といったパトロンの庇護を求めるものではなかった<sup>(28)</sup>。「民主主義」の国、フランスにおける解決法というのは、一言でいえば文学界だけで資金を工面するというやり方である。すなわち、若い文学者を財政的に助けるために、古典作家の作品の売り上げから出る印税の一部を基金とすることで、文学の先輩から後輩へ、祖先から子孫への援助の金銭の流れを作るという試みである。

この文脈から考えると、同年5月に発表された「擁護」というアカデミー・フランセーズ論は、同様の観点からの文人組織に対する分析だと言することができる。これもまた要約をするなら、マラルメにとって問題だったのは、このアンシャン・レジーム的な組織を現代化すること、具体的に言えば、「不死の人」と呼ばれる40人のメンバーを特権化するのではなく、アカデミーの図書館に眠る書物をこそ不死の存在として保護する組織を思い描くことであった。文学基金であれアカデミーであれ、文学界の先輩から後輩への金銭、そして言葉の遺贈が行われることに変わりはないのである。

ここでは、第1章の師弟小説論の延長線上で、師匠から見た弟子とのコミュニケーションの場面として、「行動」(1895)と題された論考を見てみよう。冒頭は、先に見たカミーユ・モークレールの『死者たちの太陽』の裏面とも言うべき情景が描かれている。師匠のもとに、弟子が思いつめた様子でやってくるのである。

一人の〈仲間〉が、いつも同じ人なのだが、何度もやって来ては、私に行動の欲求を打ち明けた。彼は何を目指していたのか——私のところに、若いこの男の方から歩み寄ってきたのは、創造の仕事という触れ込みであったのだし、その仕事は至高のもので言葉を使うことで成就するように思われるのだから。こだわろうだが、彼は殊更に何を言おうとしていたのか<sup>(29)</sup>。

師匠のもとを訪ねた「仲間 Camarade」——この戦友や労働者仲間、政治的同志を想起するような、親密さを示すニュアンスを持つ語の選択も重要である——は政治行動、具体的には当時のアナーキズム運動への欲求を打ち明けるが、ここでは師匠の立場から、文学という創造の仕事へ迷いを感じている弟子に対して、応答が試みられている。

この論考は『ディヴァガシオン』に収録された際には「限定された行動」と改題され、「書物はといえれば」というセクションに収められている。結末近くには「非人称化されて、本は、そこから著者を引き離す限り、読者の接近を求めるとはならない」と語られ、マラルメにおける書物の絶対的自律性・超越性を例証するものとして、しばしばこの箇所だけを切り出されて引用されてきた。しかし、このような解釈は果たして有効だろうか。むしろ、この論考は師匠が弟子に、現代の文学者がとるべき「行動」を助言するという行為遂行的なテキストであり、「行動」を分析する際には、それが「書物」についての純然たる命題群なのではなく、むしろ、詩人が「君 tu」と語りかける仲間に対して、政治的行動を自重して書物を刊行するように説得している文章であることを、考慮に入れる必要があるだろう。

実際、このテキスト上には tu に対する呼びかけが多々見られる。とりわけ後半、現在は文学が社会から切り離されている「空位時代」であるという認識が語られた後に、「身を守り、ここにいなさい garde-toi, et sois-là」と、直接行動に走ることを自重するように訴え、「出版しなさい Publie」と告げている。そして問題の書物の非人称性が語られることになる。先ほど示した箇所の前後も含めて引用してみよう。

〈書物〉、そこにおいては精神は溶解し——署名者は、わきにのけられてしまう、というよりむしろ〈書物〉は大昔から噴出することを計算に入れて、自らもろとも君 te、つまり署名者を投げ上げ、そしてあの激しい宙吊りの不安に至らしめるのだが——こうした〈書物〉は、誤解されている場合でも、[自ら]飛び跳ねて時間の大部分を揺さぶって純粹さといったものを保つことによって、[書物に長年積もったホコリを払う]義務があった人を満足させるのだ。非人称化されて、一冊の本は、そこから著者を引き離すのに十分であり、それとは別に、読者の接近も求めるとはならないのである。次のことを、知っておきなさい *sache*、人間の付属物の中で、書物だけがただそれだけで存在するという。作られ、在るのだ<sup>(30)</sup>。



難解な箇所であり、[ ]内は筆者による解釈であるが、下線で強調した箇所が、書物が著者や読者の存在を不要としているという話ではないことは、「出版しなさい」というメッセージと矛盾していることから明らかであろう。むしろ、アカデミー・フランセーズ論で見たように、書物は現在読まれなくても図書館の書棚に保管されることで、時空を超えて存在し続ける不死の存在なのだから、読者の無理解を恐れたり、文学という行動のつましさに失望せずに刊行するべきだ、という師匠から弟子への助言なのではないか。しばしばマラルメの詩学として語られる「文学の自律性」が実際には何を意味しているのかは、文脈を追わないと正確に把握できないこと、そして文学集団という観点から見ていくことで、テキスト自体に師匠から弟子へのディスクリールが織り込まれていることが、明らかになったように思う。師匠のメッセージは、この時代に弟子が置かれた状況を解明してはじめて、わたしたち未来の読者にも届く形になるのである。

もう一つ、マラルメ研究ではあまり言及されないテキストを、師匠から弟子への教育論として読むことで、詩人の新たな一面を取り上げてみよう。「行動」と同じ年に出された論考「さまざま Particularités」(『ディヴァガシオン』収録時のタイトルは「孤独」)では、「文学的生活と[……]世界のかかわり」<sup>(31)</sup>をめぐる3つのスケッチが描かれている。具体的には同志、弟子、ジャーナリストとの対話の風景であるが、「流派の罫」<sup>(32)</sup>と名づけられた弟子との関係を見ていこう。マラルメによれば、弟子たちが「師匠」と呼ぶのを真に受けて、師匠が彼らに個人的な見解を示せば、弟子たちの独立した精神をつぶすことになり、結局は当たり障りのない「一般的な見解のようなもの」を表明するしかなくなる。また師弟間の「直接の会話 *conversations directes*」から新しいものが生まれることも期待できない。教育が前提にある師弟関係に対して、マラルメは懐疑的である。

それではどうすればいいのか。師匠に教育の義務を、弟子に隷従を免れさせる手段としてマラルメが依拠するのは、またも「作品」である。

教育はそれを与える者にも、それを受け入れる者も束縛する、作品を介してであるなら別であるが。教えることは私にとっては常に、内的な行為のように思っていた。ああ、例えば祝祭、何物もそれを外で祝うことがない、そしてあの陶醉、新参者と年長者の光の融合。思うに、こうした婚姻だけが神秘のものなのである<sup>(33)</sup>。

弟子たちに原理を教え込むのではなく、自分の詩集や原稿を手ずから渡し、彼らが書いた本に「反響のようなもの」を聞き取ることを、マラルメは師匠の務めとしている。「内的」「神秘的」と語られるコミュニケーションであるが、それは必ずしも閉鎖的で秘教的なものであるわけではない。書物を通じて行われることで、両者の精神において成立するコミュニケーションであると同時に、本を読むことができる一般の読者にも開かれたコミュニケーションであることが特徴的である。

またこうした交流は、「新参者と年長者の光の融合」、さらには陶醉を与えてくれる「婚姻 *noces*」として語られる。男性の年長者と年少者の結婚のイメージは、1879年に幼くして亡くなった息子アナトールのために残されたメモ『アナトールの墓』では、父と息子の結婚としてすでに登場している<sup>(34)</sup>。また後に発表される『賽の一振り』(1897)でも、難破した船の「船長=師 *Maitre*」が波にのまれるなかで「婚約 *Fiançailles*」が行われ「幼い影 *ombre puérile*」が生起するという物語が読み取れる<sup>(35)</sup>。マラルメが理想と考える師弟関係は、父と息子の結婚というヴィジョンを背景に持っており、そこには父から息子への遺贈というテーマだけでなく、息子から父へ純粋さが伝えられるという、逆方向の遺贈があるという点からも、マラルメにおける文学集団と父子関係のアナロジーはさらに探求していくべき問題であろう。

最後に、マラルメが残した〈書物〉の計画に関するメモをとりあげたい。これはしばしば朗読会とい

う形態から論じられてきた。すなわち、多くのメモに見られる数字を使えば、24人の参加者からなる朗読会では、「操作者 *opérateur*」と称するマラルメが、6つの引き出しの中から、詩句が書かれた紙を一枚ずつ選び、その場でそれらの紙を折り畳んで本を作り、解釈をするという儀式を読み取ることができる。しかしこの祝祭はそれで終わるわけではないようである。こうした朗読会を何回か繰り返してできた本を48万部出版し、1冊1フランで大衆に行き渡らせる。完売したとき、マラルメの手元に残るのは次回の出版費用だけであって、まさに「何も起こらないだろう、場所以外は」（『賽の一振り』）という事態が実現する企画だったのである。

24人の参加者たちと1人の操作者が集う儀式は、火曜会をモデルとしたものであるが、それを最後に大衆に開くというのは、同時代に発展を遂げた新聞をモデルとしたものであろう。「陳列」（1892）という論考でマラルメは、詩が売れない今だからこそ、詩を新聞のように大量に伝播させることで生まれる「民衆的祝祭」を夢想していた。ユートピア的思考であることは否定できないものの、その前提にあるのは、火曜会という文人組織の日々の活動と、ジャーナリズムという、これもまたマニフェストの表明などで多くの文学者が活用していたものなのである。マラルメの〈書物〉の教えといったものは、現代風に言えば、教室でライブ授業を行い、それを動画で配信するような、オープン・エデュケーションのようなものとも言えよう。

## 結論に代えて

以上、本論では文学集団の詩学という観点から、他の同時代の詩人との関係を見逃されがちな「孤高の詩人」マラルメについて、師弟のまじわりを中心に論じてきた。マラルメの火曜会のみならず、19世紀末の文学サークルは、それまで外部から文学場を維持してきたパトロン（国家、貴族、女主人……）が衰退する中で、自らの活動によって象徴価値を高める必要が生じた。そこでパトロンの代わりとなったのが他の文学者の言説の力、とりわけ年長文学者（師匠）による、年少文学者（弟子）に付与するギャランティである。ヴェルレーヌとは異なり、マラルメはそういった時代の要請に忠実に応えた存在であったと言ってよく、「文学の神学」といったものを打ち立てることで、20世紀にも続く文学共同体・前衛芸術家集団が存在する地盤を築いた<sup>(36)</sup>。

一方で、こうしたサロンから文学集団への移行が、火曜会をはじめとして、世紀末の文壇に潜むホモソーシャル的な空間を醸成したことは否定できない<sup>(37)</sup>。ニナ・ド・ヴィヤールのサロンなど、女性が主宰するサロンは1870年代まで大きな位置を占め続けたが、第三共和政の安定期に入る1880年代以降になると、マラルメやゴンクールによる、英国の「クラブ」のような男性専用のサークルに場を譲っていくことになる。『ヴィーナス氏』や『自然を逸する者たち』で知られる女性作家ラシルドは火曜にサロンを開いていたが、夫アルフレッド・ヴァレットが編集していた『メルキユール・ド・フランス』の作家を迎えるサロンという色彩が強く、またラシルド自身も「文人 *homme de lettres*」とサインしていたように、女性としてではなく「男 *homme*」として文学界に参入しているという意味で、例外的な存在であると言わざるを得ない。またマラルメの近くにも、メリー・ローランという文学者や芸術家を愛し、『失われた時を求めて』のオデットのモデルとも言われる女性がいたが、彼らを集める拠点を作り出していたかとなると疑問がある。必要なのは、男性が基調である当時の文学集団のなかで、女性詩人を「発掘」することだけでなく、男性詩人たちが女性をミュージックとして一方的に扱ってきた伝統そのものをまず問い直すことであり、また、ラシルドの男装に見られるようなトランス・ジェンダー的側面や、ジャン・ロランなどの同性愛的側面が、ホモソーシャル的な秩序を内部から問いただす契機となるかを論じることであろう<sup>(38)</sup>。

本論で大きなテーマとなったのは、「文学の自律性」を文学集団の観点から再考することであった。

19世紀後半に確立したとされる文学の自律化は、必ずしも文学活動が社会から遊離していくことを意味するものではない。むしろ政治や宗教的権威、ジャーナリズムとの競合の中から、文学・芸術は社会の中でカウンターとしての役割を負うのであり、文学・芸術場の中でもとくに既成の立場を革新することで頭角を現したものが「前衛」と呼ばれたのである。作品は単に社会の反映ではなく、社会に対して対立も含み込むような関係を結ぶのであり、そのとき自律した文学場を形作るのには、文学集団の言説となるわけである。比喩的に言えば、一方に文学、他方に共和国があるのではなく、文学集団の中に共和国を見る必要があるのだ。

「文学の自律性」について言えば、マラルメはその代表的な文学者（孤高の詩人、秘教的な詩、象牙の塔……）としてさかんに言及される存在であった。しかしそれは現代に限ったことではなく、同時代においてもマラルメは同様の形で紹介され、また非難されていた。本論でも言及したカミーユ・モークレルはじめ、1890年代においてはマラルメの詩学、そして火曜会のあり方に閉塞感を感じ、路上に出てアナーキズム運動に突き進む文学者も少なくなかった。マラルメはそうした批判に反論するというよりも、「行動」という論考の分析で示したように、文学＝書物の自律性が意味するものを示すことで答えようとしている。別の比喩を使えば、マラルメが考える書物は現在時においては何の効力を持たないように見えても、いつか時限爆弾のように炸裂して、未来の誰とも知れぬ読者に光を届ける存在なのである。こうした文学の政治性を見る上でも、文学集団の観点は手放すことができないもののように思われる。

最後に、師弟のまじわりによって作品をいわばプロデュースするマラルメを、「行動」や「さまざま」といった論考から、そして「書物」というパフォーマンスの構想から素描した。そこには20世紀の前衛芸術運動において前景化する、作品の集団制作、そしてバタイユらがセクトやフリーメーソンをモデルに議論した、選択的共同体の探求の萌芽が見られるだろう（アセファル、コレージュ・ド・ソシオロジー……）。

一方で、マラルメはこうした弟子とのコミュニケーションを郵便詩という形式によっても、作品化することを試みている。封筒の表に宛名と住所を含んだ4行詩を書き記し、それが郵便配達人によって宛先の人間に届くことで作品が完成するという企画は、現代アートの先駆と言えるものだが、それは単に、詩を状況に還元するものではない。『詩集 *Poésies*』の巻頭を飾る「礼 *Salut*」は、もともとは象徴主義宣言を行ったジャン・モレアスの出版記念パーティー *banquet* の際に詠まれた詩で、冒頭の「さもないもの、この泡、汚れなき詩句 *Rien, cette écume, vierge vers*」の「泡」とは、祝杯の泡であった。しかしこのシャンパンの泡は、やがて波が立てる泡へと変貌していく。詩人は「さまざまな友人たち *mes divers amis*」と舟に乗って進んでいくが、待ち構えるのは人魚たち *sirènes* も泳ぐ荒れた海である。祝宴という状況の端々を、文学者たちが挑む運命の舞台に読みかえていくことで、軽妙な調子を残しながら、マラルメ特有のものと言え、文学についてのアレゴリーが立ち現れる。最終詩節の「孤独、暗礁、星辰 *Solitude, récif, étoile*」という詩句に、純然たる「孤高の詩人」を読むべきではないだろう。そこにあるのは、とりわけ若い文学者たちに、これから困難（暗礁）や栄光（星辰）に出くわしていこうこの文学界を、共に渡っていこうと言挙げする、詩人の姿であると言える。このような文学集団の観点からの詩作品の読みなおし、これからの課題の一つとして確認することで、筆を擱きたい<sup>(39)</sup>。

#### 注

- (1) 本稿は、2016年10月23日に東北大学で行われた2016年度日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「文学集団の詩学」において、筆者が発表した「マラルメと師弟のまじわり」を基にしたものである。発表後のパネルディスカッション等で貴重なご意見をくださった多くの方々に感謝したい。また本稿で太

- 文字で強調されているのは、「文学集団の詩学」を構成する要素として挙げられるものである。
- (2) Vincent Kaufmann, *La Faute à Mallarmé. L'aventure de la théorie littéraire*, Seuil, 2011. 以下、刊行地はその記述を省略する。
- (3) 石橋正孝, 倉方健作『あらゆる文士は娼婦である——19世紀フランスの出版人と作家たち』白水社, 二〇一六年, 二三〇—二三五頁。
- (4) Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire*, Le Seuil, 1992; coll. Points-Essais, 1998. (邦訳: ピエール・ブルデュー『芸術の規則』, 全2巻, 石井洋二郎訳, 藤原書店, 一九九五—一九九六年。)
- (5) ゴラ「文学における金銭」『文学論集』佐藤正午訳, 藤原書店, 二〇〇七年, 一五三頁。Anne Martin-Fugier, *Les Salons de la III<sup>e</sup> République. Art, littérature, politique*, Perrin, 2003, p. 415.
- (6) クリストフ・シャルル『知識人の誕生 1880-1900』白鳥義彦訳, 藤原書店, 二〇〇六年, 四九頁。
- (7) 同書, 二八頁。
- (8) ジョージ・スタイナー『師弟のまじわり』高田康成訳, 岩波書店, 二〇一一年, 四頁。
- (9) Pierre Citti, *Contre la décadence. Histoire de l'imagination française dans le roman 1890-1914*, PUF, 1987; *La Mésintelligence. Essais d'histoire de l'intelligence française du symbolisme à 1914*, Éditions des Cahiers intempêtes, 2000.
- (10) レミ・ド・グールモン『仮面の書』, 及川茂訳, 国書刊行会, 「フランス世紀末文学叢書」, 一九八四年, 一二頁。文学者列伝(文学的肖像 portraits littéraires)は文学界全体を価値づけるジャンルであり, 作家の肖像を作品と結びつけて描くことで, アンシャン・レジーム下の文芸サロンに見られるような, 発信者と受信者が顔の見える関係で結ばれていた空間をヴァーチャルな形で再現する試みとすることができる。文学者列伝というジャンルの問題については以下を参照。Hélène Dufour, «Portraits, en phrases»: les recueils de portraits littéraires au XIX<sup>e</sup> siècle, PUF, 1997; Adeline Wrona, *Face au portrait. De Sainte-Beuve à Facebook*, Hermann, 2012.
- (11) バレスの三部作の展開について, 詳しくは以下の拙論を参照。「エドゥアルド・フォン・ハルトマンとフランス象徴主義」『ヨーロッパ研究』(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ドイツ・ヨーロッパ研究センター)二〇〇九年, 第八号, 八三—九九頁。また, ジュール・ユレのインタビュー interview, enquête——この各作家へのインタビュー連載もまた, この時代の文学集団の形成に重要なファクターである——において, バレス自身がこの三部作を次のようにまとめている。『「蛮族の眼の下で」はある若者が自らを知り, 発展させ, 他者から身を守る困難さを示しています。『自由人』は自我の訓練を論じた文章です。どのようにイグナチオ・デ・ロヨラや聖人たちの生涯の手法を用いて, 自我によって世界に存在する感情をすべて感じるようにできるかというのが問題でした。『バレンスの園』は一方で, 内なる生の必然性と行動する生の義務を和解させるために書かれたものです。また他方では, 神のようなものと呼べる無意識の前に降伏することでした。』Jules Huret, *Enquête sur l'évolution littéraire* [1891], éd. Daniel Grojnowski, José Corti, 1999, p. 70.
- (12) Maurice Barrès, *Homme libre* [1889], in *Romans et voyages*, éd. Vital Rambaud, Robert Laffont, «Bouquins», 1994, p. 179.
- (13) この時代の師弟小説を論じたものとしては, シッティの著作以外に次を参照。田中琢三「ブルジェ『弟子』と一九世紀末「問題小説」における師弟関係」『お茶の水女子大学人文科学研究』第9巻(2013年), 三七—四六頁。
- (14) 序文の内容については, 同論文, 三七—三八頁。
- (15) Calixteについては, ブルジェの『弟子』の師匠の名前 Sixte の反響も読み取れると同時に, マラルメの詩作品に出てくる「calice 花の<sup>うてな</sup>萼 = 聖杯」の響きを聞くことも可能かもしれない。
- (16) À Camille Maclair, 19 juin 1898, *Mallarmé Correspondance X*, éd. Henri Mondor et Lloyd James Austin, Gallimard, 1984, p. 218.
- (17) Maclair, *Le Soleil des morts* [1898] in Guy Ducrey (éd.), *Romans fin-de-siècle: 1890-1900*, Robert Laffont, «Bouquins», 1999, p. 1025.
- (18) Huret, *op. cit.*, p. 109.
- (19) 実際, モレアスはギリシャ出身であった。また後年の「未来派宣言」(マリネッティ)や「ダダイスト宣言」(ツァラ)もフランスにおいて同様の扱いを受けることもあった。
- (20) Verlaine, «À Stéphane Mallarmé» (1889), *Œuvres poétiques complètes*, éd. Jacques Borel, Gallimard, Bibl. de

- la Pléiade, 1962, p. 557.
- (21) «Sur l'évolution littéraire», *Mallarmé. Œuvres complètes II*, éd. Bertrand Marchal, Gallimard, Bibl. de la Pléiade, 2003, p. 700. (以下 *II* と省略。)
- (22) *Ibid.*
- (23) *La Musique et les Lettres, II*, p. 70.
- (24) 邦訳があるものとしては次を参照。ゴードン・ミラン『マラルメの火曜会——神話と現実』柏倉康夫訳、行路社、二〇一二年。(Gordon Millan, *Les «Mardis» de Stéphane Mallarmé. Mythes et réalités*, Nizet, 2008.) この研究が大きく依拠しているのは、火曜会の主要メンバーであるアンリ・ド・レニエの日記である。Henri de Régnier, *Les Cahiers. 1887-1936*, éd. David J. Niederauer et François Broche, Pygmalion/Gérald Watelet, 2002.
- (25) 本章は拙著 *La Fête selon Mallarmé* (L'Harmattan, 2008.) の第9章第2節「文学的遺贈」を、師弟関係という本稿の観点からまとめなおしたものであることとお断りしておく。
- (26) 墓として知られるゴーチエ、ポー、ボードレル、ヴェルレーヌへの追悼詩だけでなく、ヴィリエ・ド・リラダン、パンヴィル、テニソン、モーパッサン、画家のマネやベルト・モリゾへの追悼文も残している。『夜のガスパール』のベルトランの墓も計画があった。また「墓」という詩のジャンルは、ルネサンス期に既に存在していたが、19世紀後半になって復活したものであり、そこには文学の自律化の時代における詩壇のマニフェスト的側面が読み取れる。Dominique Moncond'huy, «Qu'est-ce qu'un tombeau poétique?», *La Licorne*, N° 29, «Le Tombeau poétique en France», Poitiers, UFR de Langues et Littératures, 1994, p. 3-16.
- (27) マラルメが詩壇の中だけではなく、社会的にも名声を確立するようになったのは、1891年2月にモーリス・ド・フルーリイによるマラルメの紹介記事が『フィガロ』紙に掲載され、翌月にジュール・ユレによるインタビューが『エコー・ド・パリ』紙に掲載されたことだとされる。川瀬武夫「『散文さまざま』解題」『マラルメ全集 III 別冊 解題・註解』筑摩書房、一九九八年、二一六頁。
- (28) 「私自身は、我が国特有の事情を鑑みて、[イギリスの大学の「フェロー」という] こうした制度に反対してしまうのである。というも、外部から認可された希少な立場というものに対して何かよく分からない敵意が染みついているからである。そんな立場は書くという行為では全くない。」*La Musique et les Lettres, II*, p. 57.
- (29) «L'Action», *Revue Blanche*, 1<sup>er</sup> février 1895, p. 97 (*II*, p. 214).
- (30) *Ibid.*, p. 101 (*II*, p. 217). (筆者強調)
- (31) «Particularités», *Revue Blanche*, 1<sup>er</sup> novembre 1895, p. 418 (*II*, p. 256).
- (32) *Ibid.*, p. 420 (*II*, p. 258).
- (33) *Ibid.*, p. 419 (*II*, p. 257).
- (34) 「結婚 hymen 父と息子」(M23)「私自身お前と一つだった、どこまでも行ってしまおう——／——しかしお前が望むなら、二人でしよう……結婚を——婚姻、この上ない婚姻」(M41-M42)。詳細は次の拙論を参照。「マラルメの「喪の日記」？」『人文研究(神奈川大学)』一八四号、二〇一四年、七三—一〇八頁。
- (35) 以下の拙論を参照。「マラルメと「遺贈」」『人文研究』一七一号、二〇一〇年、五五—七五頁。
- (36) ヴァンサン・コフマンはシュルレアリスムから状況主義に至る前衛芸術運動の集団性の問題を、マラルメの「書物」を起源として論じている。Vincent Kaufmann, *Poétique des groupes littéraires (Avant-gardes 1920-1970)*, PUF, 1997.
- (37) サロンと女性の問題については、以下を参照。ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リンシュ『ヨーロッパのサロン——消滅した女性文化の頂点』石丸昭二訳、法政大学出版局、一九九八年。
- (38) その一つとして、以下の拙論を参照。「BL小説の起源? ——ラシルド『自然を外れた者たち』分析」『人文研究』一八一号、二〇一三年、五一—六九頁。
- (39) 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(B)「美術批評から見たフランス象徴主義の言説の場の再構成」による研究成果の一部である。

## 「文学集団の詩学」に関わる書誌<sup>(1)</sup>

### 文学集団 groupe littéraire

- GLINOER (Anthony) et LAISNEY (Vincent), *L'Âge des cénacles. Confraternités littéraires et artistiques au XIX<sup>e</sup> siècle*, Fayard, 2013.
- KAUFMANN (Vincent), *Poétique des groupes littéraires (Avant-gardes 1920-1970)*, PUF, 1997.
- MARTIN-FUGIER (Anne), *Les Salons de la III<sup>e</sup> République. Art, littérature, politique*, Perrin, 2003.
- SAINT-AMAND (Denis), «Groupe», dans GLINOER (Anthony) et SAINT-AMAND (Denis) [dir.], *Le Lexique socius* (site internet).  
<http://ressources-socius.info/index.php/lexique/21-lexique/195-groupe>
- SAINT-AMAND (Denis) [dir.], *La Dynamique des groupes littéraires*, Presses Universitaires de Liège, 2016.
- 『文学』（「特集：文壇のアルケオロジー」），2016年5-6月号，岩波書店。

### 文学の社会学 Sociologie de la littérature

- BOURDIEU (Pierre), *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire*, Le Seuil, 1992; coll. Points-Essais, 1998. (邦訳：ピエール・ブルデュー『芸術の規則』，全2巻，石井洋二郎訳，藤原書店，1995-6.)
- CHARLE (Christophe), *Naissance des «intellectuelles»: 1880-1900*, Minuit, 1990. (邦訳：クリストフ・シャルル『知識人の誕生 1880-1900』，白鳥義彦訳，藤原書店，2006.)
- CHARLE (Christophe), *Paris fin de siècle. Culture et politique*, Seuil, 1998.
- DUBOIS (Jacques), DURAND (Pascal) et WINKIN (Yves) [dir.], *Le Symbolique et le Sociale. La réception internationale de la pensée de la Pierre Bourdieu*, Presses Universitaires de Liège, 2015.
- GIOCANTI (Stéphane), *Une histoire politique de la littérature*, Flammarion, 2009; «Champs essais», 2011.
- SAPIRO (Gisèle), *La Responsabilité de l'écrivain. Littérature, droit et morale en France (XIX<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècle)*, La Découverte, 2014.
- SAPIRO (Gisèle), *La Sociologie de la littérature*, La Découverte, 2014.

### 19世紀後半の「世代 génération」, 「文学集団」

- BADESCO (Luc), *La Génération poétique de 1860. La Jeunesse des deux rives. Milieux d'avant garde et mouvements littéraires. Les œuvres et les hommes*, Nizet, 1971.
- CAMERON (Keith), KEARNS (James) (dir.), *Le Champ littéraire 1860-1900 (Études offertes à Michael Pakenham)*, Rodopi, 1996.
- CHARPIN (Catherine), *Les Arts incohérents (1882-1893)*, Syros alternatives, 1990.
- CITTI (Pierre), *Contre la décadence. Histoire de l'imagination française dans le roman 1890-1914*, PUF, 1987.
- CITTI (Pierre), *La Méintelligence. Essais d'histoire de l'intelligence française du symbolisme à 1914*, Éditions des Cahiers intempestifs, 2000.
- MENDES (Catulle), *La Maison de la vieille [1894]*, éd. Jean-Jacques Lefrère, Michael Pakenham et Jean-Didier Wagner, Champ Vallon, «Dix-neuvième», 2000.

- MAINGUENEAU (Dominique), *Le Contexte de l'œuvre littéraire: énonciation, écrivain, société*, Dunod, 1993.
- MAINGUENEAU (Dominique), *Trouver sa place dans le champ littéraire. Paratopie et création*, L'Harmattan, 2016.
- MARQUEZE-POUEY (Louis), *Le Mouvement décadent en France*, PUF, 1986.
- MILLAN (Gordon), *Les «Mardis» de Stéphane Mallarmé. Mythes et réalités*, Nizet, 2008. (邦訳: ゴードン・ミラン『マラルメの火曜会——神話と現実』, 柏倉康夫訳, 行路社, 2012.)
- MORTELETTE (Yann), *Histoire du Parnasse*, Fayard, 2005.
- OBERTHÜR (Mariel), *Le Cabaret du Chat Noir à Montmartre (1881-1897)*, Slatkine, 2007.
- PONTON (Rémy), «Programme esthétique et accumulation du capital symbolique. L'exemple du Parnasse», *Revue française de sociologie*, vol. 14, 1973, p. 202-220.
- RICHARD (Noël), *À l'aube du symbolisme*, Nizet, 1961.
- RICHARD (Noël), *Profils symbolistes*, Nizet, 1978.
- SAINT-AMAND (Denis), *La Littérature à l'ombre. Sociologie du Zutisme*, Classiques Garnier, 2013.
- TEYSSÉDRE (Bernard), *Arthur Rimbaud et le foutoir zutique*, Léo Scheer, 2011.
- WHIDDEN (Seth) [dir.], *La Poésie jubilatoire. Rimbaud, Verlaine et l'Album zutique*, Classiques Garnier, 2010.
- *Album zutique*, éd. Pascal Pia, Cercle du livre précieux, 1961; rééd., Genève, Slatkine, 1981; Éditions du Sandre, 2008.
- *Dixains réalistes*, éd. Michael Pakenham, Éditions des cendres, 2000.
- *Album zutique - Dixains réalistes*, éd. Daniel Grojnowski et Denis Saint-Amand, GF Flamarrion, 2016.
- 田中晴子『フュニスム論』, 新書館, 1999.

文学者列伝 (文学的肖像) portraits littéraires, カリカチュア caricature

- ADAM (Paul), *Symbolistes et décadents [1886-7]*, éd. Michael Pakenham, University of Exeter, «Textes littéraires», 1989.
- BARBEY D'AUREVILLY (Jules), «Les Trente-sept Médaillonets du *Parnasse contemporain*» [1866], in *Articles inédits*, éd. Andrée Hirschi et Jacques Petit, Université de Besançon / Les Belles Lettres, 1972, p. 141-156.
- DUFOUR (Hélène), «Portraits, en phrases»: *les recueils de portraits littéraires au XIX<sup>e</sup> siècle*, PUF, 1997.
- GOURMONT (Remy de), *Le Livre des masques [1896 et 1898]*, éd. Daniel Grojnowski, Manucius, 2007. (邦訳: レミ・ド・グールモン『仮面の書』, 及川茂訳, 国書刊行会, 「フランス世紀末文学叢書」, 1984.)
- LAZARE (Bernard), *Figures contemporaines: ceux d'aujourd'hui, ceux de demain*, Perrin, 1895.
- MALLARME (Stéphane), «Quelques médaillons et portraits en pied», in *Divagations*, Fasquelle, 1897; *Œuvres complètes*, éd. Bertrand Marchal, tome II, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2003, p. 113-152.
- SAINTE-BEUVE (Charles-Augustin), *Portraits contemporains [1846 et 1869-71]*, éd. Michel Brix, PUPS, «Mémoire de la critique», 2008.
- SAINTE-BEUVE (Charles-Augustin), *Portraits de femmes [1844 et 1870]*, éd. Gérald Antoine, Gallimard, «Folio classique», 1998.

- SAINTE-BEUVE (Charles-Augustin), *Portraits littéraires* [1844 et 1876-8], éd. Gérard Antoine, Lafont, «Bouquins», 1997.
- VERLAINE (Paul), *Les Poètes maudits* [1884 et 1888], éd. Michel Décaudin, CDU-SEDES, 1982.
- WRONA (Adeline), *Face au portrait. De Sainte-Beuve à Facebook*, Hermann, 2012.
- *Portraits littéraires* [Croquis féminins d'Anatole France, *Figurines des poètes* de Catulle Mendès et *Portraits-cartes* d'Adolphe Racot], éd. Michael Pakenham, University of Exeter, «Textes littéraires», 1979.
- *Portraits du prochain siècle. Tome premier: Poètes et Prosateurs*, Edmond Girard, 1894; rééd., L'Arche du livre, 1970.
- 鹿島茂, 倉方健作『カリカチュアでよむ 19世紀末フランス人物事典』白水社, 2013.

#### インタビュー interview, enquête

- BARRES (Maurice), «L'esthétique de l'interview», *Le Journal*, 2 décembre 1892.
- HURET (Jules), *Enquête sur l'évolution littéraire* [1891], éd. Daniel Grojnowski, José Corti, 1999.
- HURET (Jules), *Interviews de littérature et d'art*, Thot, 1984.
- LEYRET (Henri), «M. Émile Zola interviewé sur l'interview», *Le Figaro*, 12 janvier 1893.
- MIRBEAU (Octave) et HURET (Jules), *Correspondance. Interviews et articles*, éd. Pierre Michel, Tusson, Du Lérot, 2009.
- THERENTY (Marie-Ève), *La Littérature au quotidien. Poétiques journalistiques au XIX<sup>e</sup> siècle*, Seuil, 2007.
- «Les interviews de Leconte de Lisle», éd. Edgar Pich, *Bulletin d'études parnassiennes et symbolistes*, n° 34, automne 2004, p. 7-28.
- *Les Interviews de Mallarmé*, éd. Dieter Schwarz, Neuchâtel, Ides et Calendes, 1995.
- *Lieux littéraires*, n° 9/10, «L'Interview d'écrivain. (1870-1914)», Montpellier, 2006.
- 倉方健作「「高踏派」の擁護と顕揚：『文学の進展に関するアンケート』をめぐって」, 『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』, 第 19 号, 2010, p. 157-170.
- 田中琢三「ジュール・ユレの『アンケート』における世代の問題：19世紀末の小説の状況に関する一考察」, 『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』, 第 19 号, 2010, p. 143-155.

#### 「墓 Tombeau」

- *Le Tombeau de Théophile Gautier* [1873], éd. François Brunet, Honoré Champion, 2001.
  - *La Licorne*, N° 29, «Le Tombeau poétique en France», Poitiers, UFR de Langues et Littératures, 1994.
- 師弟 maître et disciple
- *Littérature et Nation*, N° 14 («Mallarmé a-t-il eu des disciples……de son vivant?») et N° 15 («Mallarmé a-t-il eu des disciples……après sa mort?»), Publication de l'Université François-Rabelais Tours, 1995.
  - ジョージ・スタイナー『師弟のまじわり』, 高田康成訳, 岩波書店, 2011.
  - 田中琢三「ブルジェ『弟子』と一九世紀末「問題小説」における師弟関係」, 『お茶の水女子大学人文科学研究』, 第 9 卷, 2013, p. 37-46.

#### 雑誌・出版 revues, journalisme

- BARRAUD (Cécile), *La Revue blanche (1891-1903): La Critique littéraire et la littérature en question*, ANRT, 2007.



- BOURRELIER (Paul-Henri), *La Revue blanche: une génération dans l'engagement 1890-1905*, Fayard, 2008.
- DIDIER (Bénédicte), *Petites revues et esprit bohème à la fin du XIX<sup>e</sup> siècle (1878-1889)*. Panurge, Le Chat noir, La Vogue, Le Décadent, La Plume, L'Harmattan, 2009.
- FRECHET (Patrick), *Bibliographie des éditions de la Revue blanche 1892-1902*, Tusson, Du Lérot, 2006.
- GISPERT (Marie) (éd.), *La Critique d'art au Mercure de France (1890-1914)*, ENS, 2003.
- KALANTZIS (Alexia), «Du périodique au recueil. Le rôle du support éditorial dans l'évolution des formes à la fin du XIX<sup>e</sup> siècle», *L'Écrit à l'épreuve des medias. Du Moyen-Âge à l'ère électronique*, Classiques Garnier, 2012, p. 297-311.
- KALIFA (Dominique) et al., *La Civilisation du journal. Histoire culturelle et littéraire de la presse française au XIX<sup>e</sup> siècle*, Nouveau Monde, 2011.
- LUCBERT (Françoise), *Entre le voir et le dire. La Critique d'art des écrivains dans la presse symboliste en France de 1882 à 1906*, PUR, 2005.
- MOLLIER (Jean-Yves), *L'Argent et Les Lettres. Le capitalisme d'édition 1880-1920*, Fayard, 1988.
- MOLLIER (Jean-Yves), *Une autre histoire de l'édition française*, La Fabrique, 2015.
- STEAD (Évanghélia) et VEDRINE (Hélène) (dir.), *L'Europe des revues (1880-1920). Estampes, photographies, illustrations*, PUPS, 2008.
- VERILHAC (Yoan), *La Jeune Critique des petites revues symbolistes*, Publications de l'Université de Saint-Étienne, 2010.
- 石橋正孝, 倉方健作『あらゆる文士は娼婦である 19世紀フランスの出版人と作家たち』白水社, 2016.
- 合田陽祐「初期『メルキュール・ド・フランス』誌の方針と実際」, 『Les Lettres françaises』, 35号, 2015, p. 41-52.
- 合田陽祐「世紀末の文芸誌と作家たち」, 『Nord-Est』, 日本フランス語フランス文学会東北支部会報, 9-10号, 2016.

#### マニフェスト manifeste littéraire

- BURGER (Marcel), *Les Manifestes: paroles de combat. De Marx à Breton*, Delachaux et Niestlé, 2002.
- COMPAGNON (Antoine), *Les Cinq Paradoxes de la modernité*, Seuil, 1990. (邦訳: アントワーズ・コンパニオン『近代芸術の五つのパラドックス』, 中地義和訳, 水声社, 1999.)
- ILLOUZ (Jean-Nicolas), «Les manifestes symbolistes», *Littérature*, n° 139 («Marges»), septembre 2005, p. 93-113.
- MOREAS (Jean), «Manifeste littéraire», Supplément littéraire du *Figaro* du 18 septembre 1886.
- *Revue des sciences humaines*, N° 295 («Préfaces et manifestes du XIX<sup>e</sup> siècle»), Lille, PUS, juillet-septembre 2009.

#### コラボレーションと対抗的コラボレーション collaboration & contre-collaboration

- DESSY (Clément), *Les Écrivains et les Nabis: la littérature au défi de la peinture*, PU Rennes, 2015.
- GAMBONI (Dario), *La Plume et le pinceau. Odion Redon et la littérature*, Minuit, 1989. (邦訳: グリオ・ガンポーニ『「画家」の誕生—ルドンと文学』, 廣田治子訳, 藤原書店, 2012.)
- PEYRE (Yves), *Peinture et poésie: Le dialogue par le livre (1874-2000)*, Gallimard, 2001.

- WHIDDEN (Seth) (ed.), *Models of Collaboration in Nineteenth-Century French Literature: Several Authors*, One Pen, Ashgate, 2009.

#### 出版記念パーティーなどの宴 banquet littéraire

- CABANES (Jean-Louis), «Les banquets littéraires: pompes et circonstances», *Romantisme*, n° 137 («Banquets»), mars 2007, p. 61-77.
- SCHUH (Julien), «Les dîners de la Plume», *Romantisme*, N° 137 («Banquets»), mars 2007, p. 79-102.

#### 作家のポーズ posture littéraire

- DESSY (Clément), «Postures du rapport à l'œuvre. Les cas de Gide et de Jarry vers 1895», *CONTEXTES* [en ligne], 8, 2011.
- MEIZOZ (Jérôme), *Postures littéraires. Mises en scène modernes de l'auteur*, Genève-Paris, Slatkine Erudition, 2007.

#### 文学論争 querelle, polémique

- BOQUEL (Anne) et KERN (Étienne), *Une histoire des haines d'écrivains: de Chateaubriand à Proust*, Flammarion, 2009; «Champs essais», 2010. (邦訳: アンヌ・ボケル, エティエンヌ・ケルン 『罵倒文学史 19世紀フランス作家の噂の真相』 石橋正孝訳, 東洋書林, 2011.)
- GLINOER (Anthony) et LAISNEY (Vincent), «Le discours anticénaculaire au XIX<sup>e</sup> siècle: un cas d'école», *CONTEXTES* [en ligne], 10, 2012.

#### サイト

- *SOCIUS: ressources sur le littéraire et le social* (site de la chaire de recherche du Canada sur l'histoire de l'édition et la sociologie du littéraire)  
<http://ressources-socius.info/>
- *CONTEXTES* (revue en ligne)  
<https://contextes.revues.org/>

#### 注

(1) この書誌は先述のワークショップ「文学集団の詩学」のパネリストである、倉方健作（九州大学）、福田裕大（近畿大学）、合田陽祐（山形大学）と共同作成したものである。網羅的なものではないが、今後こうした研究の進展に幾分でも寄与することを願って、本稿で参照しなかったものも挙げた。掲載を許可していただいた三人に感謝したい。